

NEWS: がんと生殖に関するシンポジウム 2013 「妊孕性温存の診療を考える」を終えて

平成 25 年 4 月 21 日に大手町ファーストスクエアカンファレンスにおいて、特定非営利活動法人日本がん・生殖医療研究会(JSFP : Japan Society for Fertility Preservation)主催の『がんと生殖に関するシンポジウム 2013 「妊孕性温存の診療を考える」』が東京において開催されました。当日はあいにくの雨にも関わらず多くの参加者に御来訪いただき、本邦におけるがん・生殖医療の現状の問題点、今後の課題などについて検討されました。

午前の部は、妊孕性温存療法として卵子凍結、胚凍結、さらに近年研究が進んできている卵巣組織凍結・移植の現状に関する講演が行われました。欧米諸国においては『卵巣組織凍結保存は試験的な技術であるものの、卵巣毒性を有する治療を受ける若年女性患者の選択肢として提供すべき医療行為である』と認識されつつあり、その適応は小児や乳幼児にまで急速に拡大しています。本邦においては、既に幾つかの施設が独自の方法で卵巣組織凍結保存および自家移植を試みている現状があり、今後さらなる普及を目指すためにも実施施設間の本技術に関する共通認識をもち、また解決すべき問題点を共有する必要性があると思われまます。今後、技術面、安全性、認知度の向上ならびに患者支援体制の整備が早急の課題として挙げられるのではないのでしょうか。午後の部では、各診療科の専門家より講演が行われ、乳腺外科、泌尿器科、血液腫瘍内科、小児科の立場で問題点等を抽出して頂きました。また、がん・生殖医療の周産期医療に関わる諸問題、医療連携ネットワーク構築に向けた岐阜モデルの報告、心理面でのサポートや倫理面で考えるべき事象に関する討議が行われました。今回は初めてのシンポジウムであったため、がん・生殖医療の問題点や今後の課題認識をまずは目的としたことから、フロアとの十分な議論の時間を設けることができなかつたことが大変残念でした。

本邦において、これまで若年がん患者に対する妊孕性温存療法の適応や治療法の選択などに関する議論が、生殖医療に携わる産婦人科医とがん治療に携わる専門医の間で公式の場で検討されることは少なかったかと思われまます。今後、本邦における「がん・生殖医療」の普及を志向して、患者のみならず専門の医師と医師のネットワークを構築することによって、患者と医師との間の本領域における意識の差をなくし、さらにがん・生殖医療における医療連携を再構築するため日本がん・生殖医療研究会(JSFP)では多くの関係者の方より御意見を賜りたい所存です。

文責：鈴木直、吉岡伸人（聖マリアンナ医科大学産婦人科学）